



孫鈿氏の随筆二篇

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-05-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 孫, 鈿, 大平, 桂一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004430

孫鈿氏の随筆二篇

孫 鈿 著
大 平 桂 一 訳

孫鈿氏は1917年上海生まれ。本名は郁鍾瑞、字は文源。6歳で小学校に入学、中学・大学ともに大同大学で学んだ。1933年、革命演劇演出にたずさわり、また創作活動にも手を染めた。1934年、国民党の圧迫を受け、上海を追われた彼は、日本に亡命、早稲田大学文学部に学んだ。1937年、上海に帰り、新四軍に参加し、抗日活動に携わった。1938年、胡風¹の知遇を受け、文芸工作に従事し、「七月派」の詩人として活躍した。孫鈿氏は「高野良雄の死」をはじめとする小説、「敏子へ」をはじめとする抗戦詩で名を知られるようになった。中華人民共和国成立後まもなく、孫鈿氏は胡風批判、反右派闘争²、文化大革命といった政治の波に翻弄され、「胡風反党集団」の一員として二十数年間を獄中で過ごすことになった。名誉回復後、1983年、中国作家協会に加入し、中国作家協会浙江分会顧問、寧波市作家協会主席などを歴任した。孫鈿氏は長田弘、吉増剛造、三木卓、富岡多恵子、入沢康夫、谷川俊太郎、飯島耕一、中村稔、山本太郎、吉本隆明、田村隆一、那珂太郎、宗左近、安東次男、福永武彦、大岡信ら五十七名の現代日本を代表する詩人を網羅したアンソロジー『日本当代詩選』を編集出版し、日中の文化交流に大きな足跡を残すことになった。

今回孫鈿氏の随筆二篇を翻訳するにあたっては、大阪女子大学時代のゼミ生邱虹氏の日本語の師が孫鈿氏であったこと、また恩師堀川哲男先生³の夫人堀川玲子師母が邱虹氏の日本語の師であり、孫鈿氏の知人であり、孫鈿氏の日本への紹介者であったという二つの奇縁による。ここに記して感謝申し上げる。

この随筆二篇は彼の閱歴の一端を繊細な筆致で描き出したもので、孫鈿氏の文才を何うに足る作品と思われる。これをきっかけに、来年度以降、孫鈿氏の伝記的な文章を訳出していこうと考えている。

辞書の記憶

先月、私は中山大学⁵の図書館で新聞雑誌関係の資料を調べていた時、私の署名があ

る幾篇かの散文と小説を発見し、長い間失踪していた実の子供が突然自分の前に立ち、瞳を凝らしてじっと見つめたあげく、ようやく自分の子供だとわかった時のように、しばらく茫然としていた。驚喜入り混じった気持ちは誠に筆舌に尽くし難い。現在、家宅捜索で略奪された本の一部分が我が書齋に戻って来て、ほろほろの本棚に並べられているが、その中には、終生手放せない辞典も含まれている。静かな夜に灯りの下、くつろいだ気分でもどってきた本を眺めていると、驚喜入り混じった気持ちがよみがえり、知らず知らずのうちに思い出にふけるのだ。思い出と現実の区別がつかなくなると、どうしても辛い感情が湧いてくるのを抑えきれない。私の個人の苦痛などたいしたことはないが、あの本にはよりによって時代の苦痛が集積しているのだ。

小学四年の頃、私は『水滸伝』の類の本が好きであった。わからない字があると、すぐに国語の先生のところにとんで行った。その先生は、今存命なら百歳以上になっているだろう。彼は背が高くなく、黒縁の眼鏡をかけていた。笑うと唇の端が眼鏡の縁にぶつかりそうになり、鼻にもしわが寄って来る、先生が最高にいい気分になっているのはそういう時なのだ。彼の服の袖は油污れで黒光りしており、変な臭いがしていた。彼と話をする時には、煙草の臭いが鼻を衝いた。ある日、先生は中国語の学生辞典を私にくれた。たった今買ってきたばかりらしく、とても新しく、先生は私に辞書の引き方を教えてくれた。その時私は生れてはじめて辞典に触れたのであった。幾日もしないうちに、私の国語の先生は学校を離れてしまった。帰郷したとのことであった。その後私は彼に一度も会っていないが、辞典と言えば彼のことを思い出すし、今でも彼のことが懐かしい。

中学に入ると、私はしょっちゅう古本屋をうろついていた。当時ドストイェフスキーの作品が大好きだったのである。ある時、私は財布をはたいて『貧しき人々』の英訳本を買った。完全には理解できなかったので、辞書の助けを借りざるをえなかった。およそ半月後、私は申報館の窓口で原稿料を受け取り、ただちに古本屋へ行って『英華双解字典』を買った。毎晩私は辞書を左に、『貧しき人々』を右に置いて、めんどくささげにいちいち辞書を引ながら読み進み、とうとうそれを読み終えてしまった。

日本の侵略戦争が始まると、私は日本から帰国し、すべての衣服と家具を東京で医学を学んでいた台湾の学生と、女流ピアニストの加藤さんに譲り渡し、何箱かの本だけを持ち帰った。その中には井上翠の『ポケット日華辞典』、服部操の『漢和辞典』、そのほかにとっても分厚い『広辞苑』があった。

その後、私は大別山でゲリラ戦に参加し、私は肩に銃器弾薬や米袋のほかに、小さな風呂敷包みを担いでいた。風呂敷の中には、肌着一枚と半ズボン以外に、日本から持ち

帰った井上翠の小辞典とM・ゴーリキー『クリム＝サムギンの生涯』の日本語訳本があった。雨の日には、荷が私の肩に重くのしかかり、雨水が風呂敷を濡らした。宿営地にもどり、開けてみると、肌着やズボンに包んであった二冊の本は雨水でぐっしょりと濡れており、私は長椅子の上に本を広げ、本から水が一滴また一滴と流れ落ちるのをイライラしながら見ていた。本当のところ、その頃の私には本を読んだり、辞書をひっくり返したりする時間などほとんど無かったのだが、なぜか身邊に何冊か本を携帯していないと安心できなかったのである。戦闘があったある晩、私はとうとう風呂敷をなくしてしまった。渡河作戦の時かもしれないし、負傷した政治指導員を背負った時かもしれない。とにかくなくしてしまった。ある晩私は風呂敷がなおも川辺に放ってある夢を見て、驚喜したのを覚えている。

戦争が一つまた一つと通り過ぎていった。戦争のたびに私の辞書は壊滅的な被害を受けた。私は紅衛兵が私の辞書をバラバラになるまで破き、床一面にばらまくのをこの目で見た。もし読者のみなさんがそれを目の当たりにしたらどんな態度を取られたらうか？

私は黙ってはいられなかった、私は無罪だ、私に何の罪があろう。そこで私は言った、「これは辞典だ。破っちゃだめだ。図書館に届けてくれ。」言い終わるや否や私は胸に一発くらい、紅衛兵がかすれた声で怒鳴るのを聞いた、「この反革命分子が、いったいぐだぐだ何を言ってやがるんだ、おとなしくしてろ！」私の頬にまたもや一発、鮮血が私の口元から流れ落ちた。

本棚やテーブルはひっくり返され、私は無理に怒りを抑えた。私は震えていたが、それは恐怖を覚えたのではなく、心中の怒りが燃え盛っていたのだ。その後のことは、経験者なら誰でも知っていることなので、ここでは触れない。

ある日の夕方、友人がこっそり私の一人部屋に入って来て、私の手を握った。実に温かい手であった。突然の来訪に、もてなす術もなかった。茶碗でさえ、口すすぎのコップ、ご飯茶わん、湯のみ茶碗兼用のがたった一つだけしかなかった。仕方なく近くの居酒屋で待ち合わせることにした。友人は先に行き、私は総菜屋へ行って豚の頭とアヒルの首を買った。居酒屋に私が入っていくと、友人はすでに酒を買っており、二人で酒を酌み交わすと、普段とは別種の味わいがあった。美酒が私の心を温めたのだが、本当のところ真摯な友情が私の心を温めてくれたのだ。酒をたっぷり飲んでしまい、豚の頭とアヒルの首を包んでいた紙が何枚かテーブルの上に残っていた。私は肉のカスが張りついた紙を本気で呑み込もうと思い、紙をつまんで見ると、なんと『辞源』⁵の残骸であった。それを友人に渡すと、彼は手にとり目を細めて紙片を見つめた。暗い電燈の下、じっと

見つめているうちに、手が震えだし、額には青筋が浮かび、汗が噴き出してきた。我々は互いに見つめ合っただけ息をつき、長い間物を言わなかった。

あの暗い日々、私の寝床は私の本棚であった。毎夜、人が寝静まると、私は寝床の下に置いていた反故入れの箱から分厚い『日漢辞典』と『外来語辞典』を取り出し、石油ランプの下で『アイソトープの農業分野への応用』を訳し始めるのであった。私は何も農業に関心があったわけではなく、この本を翻訳して出版する意図があったわけでもない。あの頃私には物を言う自由さえなく、出版など夢のまた夢であった。ひたすら文字と触れ合い、辞書を引いては筆を取り、文字を書きつらね、融通無碍な境地に入って、自分が侮辱され、被害を受けた人間であることをしばし忘れようとしていたのだ。私は辞典を傷つけないように辞典の表紙にプラスチックのカバーを掛け、そっと頁をめくった。そんな時には、私が遭遇した苦難を思い出し、つらい気持ちになり、たったひとりで自分の運命を嘲笑うのであった。

この世に夜明けが訪れた。真っ赤な陽光が私の本棚を照らしだした。ああ、私は本棚を持てるようになった！真っ赤な陽光が本や辞典がびっしりつまった私の本棚を照らしだした。ああ、これはもはやめちゃくちゃに叩き壊された^{くだん}件の本棚ではない。

一昨年の夏、上海を離れる一時間前、外文書店で『広辞苑』を見かけ、私は最後に残っていた一冊を購入した。分厚く重い辞典を抱えて、私は上海発の汽船に搭乗した。汽船は波を破って海上を進み、たった今買ったばかりの辞典を寝台の枕元に置き、私は幸せな気分を満たされていた。これ以降、辞書の悲運は終るのだ、永遠に、永遠に。

今年の八月十二日の夜、それは燃えるように暑い一夜であった。付近の棟に住む友人が、一抱えの辞典を持ってあたふたと私の家にやって来た。ランニングに半ズボンという出で立ちで、全身汗まみれになっていた。うろたえた様子で私に言うには、「三十になる息子が、うちにやって来て騒ぎだし、辞典を何冊も引きちぎり、本棚もひっくり返してしまった。」彼が抱えて来た辞典の中には、日本の『岩波国語辞典』の原本もあり、すでに完全に破られていた。薄いインディアンペーパー……誠に見るに堪えなかった。友人はこれらの辞典を預かってくれるように頼みに来たのであった。わけを尋ねると、『小さい頃になんで勉強させてくれなかったのだ、勉強さえさせていてくれたら、課長にも工場長にもなれただろうに』と恨み事を言いに来たんだ。やつは今大騒ぎしていて、扇風機も放り投げて壊しちまった。」

「行こう！」私はすぐに言った、「君の家に様子を見に行こう。」横町を通り抜け、彼の住む四号棟へ向かった。ドアを開けて中へ入ると、三十歳の男が、父親のベッドに横たわり、足を組み、煙草を吸い、続けざまに灰をベッドの上に落としていた。床は引き

ちぎった頁であふれていた。本棚や扇風機は床に倒れていた。

「君こんな無茶をしてはいかん。」

「俺が何をしようが、家の中のことだから、警察沙汰にはできないし、告訴もできないぜ」

「私は君の父親の友人だ。首を突っ込むのは当然だ。」

「首をつっこむだって！上等だ。やつに二万円持って来させろ、そしたら四号楼から飛び降りてやる。持って来れないならやつが飛び降りろ！」

「何をばかなことを！」

彼はベッドから飛び起きると、私と父親を指さして言った、「おまえらこそ馬鹿なことをした。俺を文盲のまま放っておきやがって！」

「私とお父さんは何十年も苦勞をしてきた、君が小さい頃は飯も碌に食えなかったんだ。どこに君を勉強させるお金があったと思う？あの頃「四人組」は「知識を持てば持つほど反動派だ」と言ってたじゃないか。」

友人は籐椅子に坐って一言も発せず、部屋の中には我々三人しかいなかった。三十歳の青年は一本また一本と煙草を吸い続け、私は沈黙するしかなかった。三人の呼吸の音は、隣組のテレビから放たれる音楽にかき消された。私の眼は床一面の紙に注がれた。私は考えていた、これは明け方の空に浮かぶ極く薄い黒雲にすぎず、そこから射してくる真っ赤な陽光を遮ることは出来ないのだ…と。

1984年春

『胡風伝』⁶読後感—胡風の死後十周年を記念して

やはり酷暑の夏だった。私ははじめじめ湿った暗い牢獄に押し込められていた。取り調べ室は脅しと怒号に満たされ、私は胡風との関係を自白せよと迫られ続けた。それは一九五五年の出来事であった。私は当時自白書を何通書いたかわからないが、取調官はすべて取るに足らぬ無意味なものとみなしていた。あれから四十年の歳月が流れたが、取調官の凶悪な顔つき、机をたたきながら大声で罵る光景が私の脳裏に浮かんでくる。牢獄で一年間くすぶっていたが、事実は事実に過ぎず、反革命のような大仰な罪状は出てくるわけもなく、私はいったん釈放された。その後一年もたたぬうちに、反右派闘争が起こり、当たり前のように私が標的にされ、大きなグループ、小さなグループを問わず、私の吊るし上げを行った。小さな町のインテリを総動員して、丸三日かけて私を糾弾する壮大な大会が開かれた。公会堂の門の両側に、二枚のカラーの風刺画が貼られていた。一枚は胡風が棺に入り、私が葬列用の哀杖を持ち、喪服を着て後につき従うもの

で、表題は「反革命分子胡風の孝行息子孫鈿」であった。もう一枚は大きなもので、胡風・梅志⁷・孫鈿そして蒋介石がいっしょに描かれ、表題は「反革命分子が密室で反党活動を画策するの図」であった。私は巨大な風刺画の前に連れて行かれ、それをじっくり鑑賞するように命じられ、次いで大会会場に入るように促がされた。大会会場の壁一面に大字報がぎっしりと貼られ、さらに会場の空間にはまるで旗さしものののように、所狭しとロープで大字報が吊り下げられていた。糾弾大会が始まると、私は右側の前列目に坐らされ、一人また一人と演台に登って、手にした吊るし上げの原稿を読み上げた。それは決まり文句や罵詈謗に満ち、とても聞くに堪えない内容であり、堪忍袋の緒も切れかけたが、極力我慢しなければならなかった。まるまる三日大会は続き、最終日の午後、私は演台に登って罪を認めるよう命じられた。「私に何の罪があるのか？」と発言すると、「打倒せよ！」というスローガンが会場全体を揺るがせた。大量に動員をかけた糾弾大会だったので、なんととしてでも収まりをつけねばならず、「頑迷な反動派の砦を陥落させろ！」という巨大な大字報が演台の前にかけられて、ようやく閉幕のはこびになった。私を「頑迷な反動派」とみなし、それを「陥落させた」というわけだ。まったく不条理で、愚劣で、荒唐無稽な出来事ではないか。それからというもの、労働による思想改造、獄中生活等々、数十年にわたりありとあらゆることが私の身に起った。

ああ、なぜ私の思いは過去の事ばかりにこだわるのか？こんなことで苦しみたくないのは山々なのに。なぜまた思い出してしまったのであろう。過去の出来事が一つまた一つと脳裏に浮かんでくる、ただそれだけのことなのか？本当にそれだけなのか？

雨上がりの朝、『胡風伝』の作者戴光中は出版されたばかりの本を私の手にわたしてくれた。私は分厚い本を撫で、スマートな表紙をなめるように見つめていると、喜びが湧き上がって来て、「とうとう出た」と呟いた。四年前、作者は胡風の伝記を書く志を立て、その後原稿は完成して出版社に委ねたと聞いた。ある会議で作者本人に会った際、出版されたかどうか尋ねたところ、出版社が長い間審査しているが、まったく音沙汰がないとのことだった。私は彼に、「時間を無駄にすることはないよ」とアドバイスした。後に作者はついに原稿を回収し、私の紹介で寧夏人民出版社にまわされた。編集者と作者の間で二年間にわたって協議がもたれ、双方が多くの資料を精査し、真剣な審査と校定を経て、胡風没後十周年の直前、ついに出版の運びとなった。作者と編集者の誠実な態度に対し、その間の事情を知る人は皆感動を禁じ得なかった。もちろん戴光中の『胡風伝』は、中国現代文学史上の財宝と言えるだろう。この財宝にどれほどの黄金が含まれるかは、読者の公平な判断にまかせる他はない。少なくとも私は、この伝記を通じて、主人公たる胡風が中国新文学のために一生をかけてどれほどの貢献を行ったかを見て取

ることができた。胡風は自分の信念に忠実であり、彼が忠誠を捧げた自らの信念は、たびたび残酷な仕方で苛まれたが、今なお輝きを失っていない。

十年前、やはり酷暑の日々が続いていた頃、昼飯のあとで一休みし、朝読んだ新聞を読み返していると、目立たない隅っこに、胡風が逝去したという小活字の数行の記事を偶然目にした。私はただちに身なりを整え、郵便局に走って梅志に弔電を打った。残念なことに胡風が出獄してから、私は一度も彼ととともに話したことがなく、上海の精神病院で一度きり会っただけだった⁸。一時代を築いた文豪が、ついに苦難と混乱に満ちた人間世界から旅立ったのだ。八宝山で最後にこの巨人に哀悼の意を表した時⁹、私の心は平静ではなく、その近郷獲帆¹⁰の家で冀沄、曾卓、化鉄らと夕食を共にした時も、私の気持ちは収まらなかった。ふと気がつけば、会食していた仲間も次第に老いてきていた。我々数人以外にも、多くの人間が胡風から薫陶を受けていたのである。今の文壇に、胡風ほど後輩の指導に心血を注いだ先輩作家は存在しないだろう。悲しいことに、胡風の薫陶を受けた人間は皆苦痛に満ちた受難者となってしまったのである。

胡風は言った、「詩作を志す人は、同時に本当の人間になろうと志さなければならない。人として恥ずることのない「人」だけが、「人」の上に形容詞としての「詩」を冠することができるのだ。」胡風はさらにこう考えていた、「すぐれた詩をたった一篇発見するのも大変なのだ。」「理性から出発した技巧的な詩は、…一度読んだらもう読む気がしなくなる。」「人生において先ず勇敢な戦士であれ、芸術に身を捧げる詩人になるのはその後だ。」胡風はこのように厳格な要求を実際自分にも適用し、実践していた。魯迅は言った、「人の世に於いていささかでも戦闘的に生きるならば、敵対者が現れるのは免れない。」まさにそのために胡風は一生を通じて陰に陽に攻撃を受け、最後は大砲で本丸を攻撃された。これは決して胡風の個性がその原因だったわけではない。胡風は「三十万言の書」を奉ったが、まともな人間ならば、胡風が天下の大罪を犯したなどと誰が信じるだろうか。私は胡風の友人そして弟子として彼の事績を回想する時、あのように情熱的な心を持ち、他人を明るく照らし続ける、大勇の人がこの世に存在したことに對し、感謝の念を禁じえない。胡風は一人の真の人間であり、真の勇士であった。しかし、今の世の中に於いて「風流人の皮を被った金持ち、風雅の士を装った不良少年、エロ本売りのチンピラ」に対しては、誰もが一顧だにしないが、心に奴隷根性を持たぬ、真の人間を見つけるのは本当に難しい。

胡風は、無期懲役の判決を受けるまで、牢獄で何度も刑を科される災厄に見舞われ続けた。二十世紀の現代において、熱愛していた祖国においてこのような事態が起こったことに彼は驚愕し、どうしようもない孤独、悲憤、苦痛にさいなまれ、ひたすら往時を

回想することで生死茫々たる日々をやり過ごしていた。時には大波が沸き立ち、時には雷が轟々と鳴り、時には細やかな雨が降り、時には風鈴がリンリンと鳴り、時には枯葉がヒラヒラ舞い散った往事を、彼は念入りに回想した。彼は、友人たちを一人も漏らすことなく思い出し、深い愛情と思いを託して数百篇の詩を作った。

私はまだ歩行困難までは行っていないが、すでに頭は真っ白になってしまった。『胡風伝』を読むにも拡大鏡の助けを借りねばならない。読み終えた後、幸いにも一人ぼつんと筆を取り、胡風を追想している。時に梅志と電話で話すが、彼女の声を聞くと、我々二人が若返り、胡風が今なお梅志の傍らで机に向い原稿を書いているような心地がするのである。受話器を置くたびに、私の目には涙があふれる。また時には私と胡風が現在も若々しく、香港九龍弥敦道を肩を並べて闊歩しつつ談笑しているような感覚にとらわれる。

なおも書くべきことがたくさんあるのだが、私に何が書けようか、私に書けるだろうか。

我々は胡風を敬愛し、彼の死を悼むが、それだけでは「後人これを哀しみてこれを鑑めとせざれば、亦た後人をして復た後人を哀しましむるなり」（後世の人が悲しむだけで反省材料としなければ、さらに後世の人を悲しませる結果となる）という事態になってしまう。胡風は今なお大声で叫んでいる、という人もいる。否、私に言わせれば、彼は大声で血涙にあふれた詩を朗読しているのだ。

1995年5月9日

注釈

- 1 胡風（1902－1985）湖北蕪春の人、本名は張光人。日本留学中、プロレタリア文学の影響を受けた。国防文学をめぐる周揚らと論争した。抗日戦争中に、重慶で雑誌『七月』を編集し、孫鈿ら多くの新人を育てた。解放後中国作家協会理事をつとめた。その後毛沢東に対し、文芸実践問題に対する長大な意見書（いわゆる「三十万言の書」）を提出し、紅樓夢論争などにも関連して、1955年に「反革命分子」と批判され、以後1979年1月まで監禁されていた。
- 2 反右派闘争は、毛沢東が提唱した「百花齊放、百家争鳴」において、共産主義への移行を加速せよという意見が大半を占めるはずという毛沢東の期待に反して、共産党の支配に対する批判的意見が優勢を占めたため、毛沢東は激怒し、全国のあらゆる機関で右派分子探しが行われた。共産党に対する批判的意見を公開した人はもちろん、無関係な人まで右派分子に仕立て上げられ、大変な数の被害者を出した。

- 3 堀川哲男先生（1936－1990） 京都大学教養部教授、専攻は中国近代史。極めて丁寧明快な講義で人気を博し、教養部のゼミで数多くの中国近代史専攻の弟子を育てた。堀川教授のゼミには東洋史専攻の学生のみならず、中国文学・国文学など他分野の学生も雲集した。著書に、『林則徐』（現在中公文庫所収）『人類の知的遺産63孫文』（講談社刊）などがある。
- 4 中山大学 広東省広州市にある総合大学。
- 5 商務印書館発行の古典語辞書。四角号碼で直接語彙を検索できる便利な構成になっていた。
- 6 『胡風伝』戴光中著 寧夏出版社1994年刊。この評伝に描かれた胡風の後半生を読むと、そのあまりに過酷で不条理な運命に慄然とするし、それに故なく巻き込まれた孫鈿氏の無念さも想像できる。
- 7 梅志（1914－2004）胡風の妻。本名は屠圯。伝記作家、児童文学作家としても有名であった。著書に『胡風伝』、『往事如烟－胡風沉冤録』、『梅志文集』四巻などがある。
- 8 1981年7月、上海の精神病院に胡風を見舞った時の様子については、「胡風と共にした運命」（『孫鈿集』文之巻295ページ）参照のこと。
- 9 胡風は北京の病院で逝去した。八宝山は北京郊外にある有名な葬儀場。
- 10 鄒獲帆、冀汭、曾卓、化鉄らはいずれも七月派の詩人・作家。胡風事件の影響を受けて逮捕監禁された。